

流れ、街の辻々には、次ぎつぎと報ぜられる戦果が揭示され、それを見て居留民は沸き立ち、中国人は呆然としている。

自分はこの朝、自分の任務とその工作の重要性を痛感した。それは本当に日本が英・米と戦争を始めてくれたからである。そしてこの時代この日に日本人として生を受け、しかも今やその一翼としてこの大討滅戦に参加出来る光榮に感泣した。

この朝から、我等の特別工作も本格的に忙しくなってきた。

自分は今内地の演説会場で幾度か絶叫した英米打倒の声を以て、上海の××波止場に立ち××倉庫に立つて苦力を叱咤している。

十年來念願して来た英米打倒の日が遂に来たのである。そのためなら、我等は一兵卒として一職工として満足し、喜んで奉公するものである。

生きている人間だから、たまには腹のたつ事も起るうが、その時はかの十二月八日の朝の感激を思い起す事にしている。

着陸すれば既に大陸である。飛行場から上海軍農場の前を通り、加納部隊長や林大八少将戦死の地入口の碑のある前を通って三十分も車で走ると上海市街である。

これが空から上海に這入る道中である。こうして日本から上海に、上海から日本に幾十度往来した事か。幾十度でなく既に昭和十四年春から月に二往復するとして百回は優に越えた訳である。

一番最初に上海に来たのは昭和十四年三月、当時外務省情報部長だった河相達夫公使が、現在泰園日本大使館の情報部長をしている岩田事務官と共に漢口に視察に行く時、どうだつて来てはとの事で、そのお供で上海を通り漢口に行った時である。その時は上海迄ダグラス機で飛び、上海から海軍の〇〇機に便乗させて貰い漢口に飛んだ。途中〇〇山附近の戦場を飛び、下から幾度か射撃された。下から射つのを上から見ると丁度傘が開く様に閃光がひらめく。

漢口に着いて閉口したのは、大陸の三月だからと思つて春仕度で来たところが、どうした天候の変化か、着いた日から翌朝に掛けてみぞれが降りえらい寒さで

中国の印象

福岡の雁ノ巣飛行場を発つて朝鮮の済州島沖を飛んで〇時間もすると海の水が次第に赤くなつて来る。初めのうちは青い海水の中に赤い様な黄色が一つのむらになつて流れて来、やがて機が大陸に近づくに従つて刻々海一面が赤い色になり、やがてまったく泥々の海の上を飛び始める。この泥沼の様な上空に來ると支那のジャンクが点々として赤い泥波を割つて西に東に走っている。間も無く崇明島がよく耕された畠や田の上を四、五百米の低空で飛び、黄浦江の上を横切り呉淞の上から大場鎮に出る。大場鎮の飛行場は、即ちさきの激戦地の大場鎮にある。空から見ると大場鎮は単に広々とした野であり畠であり、この上を機が着陸すべく大きく旋回すると、表忠塔の白い塔が翼の下から右になりに左になつて望まれる。

ある。どうかに着などして済ませ、各方面を色々視察させて頂いた。

漢口の支那人街を歩いて意外に思われた事は、此処では激しい市街戦をやらなかつたためか、上海の支那人の様に日本人に対して極端な憎悪を持つておらん様に見受けられた事である。もっともこれは三日や四日視察した位では何も解る道理は無く、唯一寸見にそう感じたというだけである。

然しその後中支に長くおり、南支に行つたりしてつくづく感じた事は、中国人も南に行く程、悪く言えば悪賢く、北に行く程悪賢さが無いという事である。

漢口からの帰りはひどい天候の日であつた。飛ぶか飛ばんか解らんがとにかく飛行場迄来いというので、軍飛行場迄岩田事務官と共に行って見ると、その時は丁度南昌攻撃の際だったと記憶するが、飛行場一面に軍用機がずらりと並び、それが悪天候をものともせず轟々と爆撃に飛び立つて行く。そして飛行場の別な場所には既に爆撃を了えて帰つて来たらしい機が一機二機と着陸して来る。何十機という飛行機が次ぎつぎに飛び立ち、飛び降りるさまは実に壮観そのものであつた。

上海行の機も天候は悪いが飛ぶというので、我々も乗せて貰い、三、四百米の低空で揚子江の上をすれすれに飛び、途中九江に寄り南京を経て上海に帰った。

二度目に上海に来たのは昭和十四年四月でこの時は上海日本総領事館の岩井英一副領事の斡旋で、今は既に亡き当時参謀本部の八課長であられた臼井茂樹大佐の命で、大本営の囑託として特殊工作の任務で香港に派遣される可く、途中上海に於て準備のため待機した時である。

あれからもう四年になる。

その後岩井副領事を班長とする特別調査班や、同じく岩井副領事の指導する中国青年の政治結社興亜建國運動に参加したり、支那派遣軍總司令部の仕事をすることになってからは、とうとう毎月上海と日本を往復する様になった。

上海で色々勉強する様になって既に四年になるが、その間に何を学んだかといえば、支那という国は実に解りにくい国だという事である。

来た当時はすべて内地流に考え、やれ思想工作はどうのこうのと口出しもし、やりもしてみたが、結果は

皆無経験から失敗に終っている。

総領事館の岩井副領事あたりは、自分を今日まで指導する上に於て相当迷惑もし困りもしたろうと思うと、まったく相済まぬ気がする。

この頃に至っては、内地から色々な関係の人が訪ねて来て、物資工作がどうの、大陸に於ける思想運動が何だのと、丁度自分が四年前にやった様な事をそのままやり出すので、今度は自分の失敗を語ってその人達に勉強して貰うという立場である。

支那に四年もいて何も解らんというのも実に変な話だが、とにかく思想、政治、経済、もしくは各個人の生活上に於ても、これが中国人のこれだという確定的な結論も掴めずにいる事は事実である。そのうちに掴めるかも知れぬが、今は何も掴んでいない。

戦争前は別として、今になって、何も別にあわてて掴んだり解ったりする必要もあるまいと思う。

複雑——これは中国を端的に表現した言葉だと言うが、上海の都市もまたこの複雑の一語に尽きる。

共同租界だとか、仏国租界だとか、愚にもつかぬ名前で区切られて都市が発展した当時から、この複雑性

はあった。それに各国の人種が寄り集っていて、しかもその中の大部分を占める中国人が複雑の見本മായようなものであるから、上海そのものが如何に複雑なものであるかは想像のはかである筈だ。

蒋介石が奥地に退却した後は、支那の金持の大部分が香港と上海に集ってしまった、第三国の権益に隠れてその庇護の下に、為す仕事も無く、自分の財産を守る事と日本の悪口をいう事と遊ぶ事とを続けて来ていたのである。

遊ぶことにしても、日本人が簡単に考えたり、したりする事とは大違いで、遊ぶ方法にせよこれまた至極複雑である。

中国の金持の遊び方は、丁度日本の博奕打と女道楽者をつなぎ合せた様な遊び方をする。

上海は戦後こうした支那の金持等の激増する一方、奥地から逃れて来た一文無しの避難民その他が何十万と集って来ている。金の有る者が一方でダンスだ麻雀だと遊び狂っていれば、他の方面では難民が軍票米を買え可く米屋の前でひしめき合って、工部局の巡捕に棒でなぐられているといった有様である。

これがもし日本の出来事だったとしたらどうだろうか。一方で金持が勝手な事をし、一方では食うにも食われぬ者が日に二百人三百人と道路の上で斃れて行くといった状態が現出したとしたら……。然し吾々が日本人である限り、この国土が皇土である限りは、その様な事は夢にも考えられぬ事である。

然し上海には現にそれがあるのだから、まったく中国は不思議な国であり、上海は複雑な街である。

上海を本当に識るには、中国の国民性を根本的に研究してからでないと、さっぱり解らぬ様である。この国民性を研究するにしても、本や机の上では矢張り駄目の様である。二十年三十年前の、まだ欧米思想が今日程這入っていない前の方が解りよかったかも知れない。

孫文全集を読むと、その中に孫文が中国民に向って、放屁をするな、放屁は外国では失礼な事になっている、といった事が書いてあるが、中国の国民性研究は、此処から出発勉強して行つて丁度よい様である。

昨日も友人の宅に行った時、その阿媽（中国人の下女）がなかなか良く働く感心な女なので、内地に連れて帰つてはと話したら、友人の奥さんがいうに、

び込む事が出来た事である。これは内地に於ても同様と思うが、支那事変では戦争以上にむずかしい戦争をしなから、どういふものか相手が中国だけにそこに割り切れぬものがあり、それに宣戦の御詔勅が降っておらんためか、何処までが戦いであり、何処からが和であるか見当が附かなかった。

然るに英米討滅戦の勃発は、内地の全同胞を感動せしめた以上に上海の同胞を感動せしめた。

それは常に現実の問題として、英米の不当にして無礼な圧迫を身に染みて受けて来た結果にも因る。居留民のこの自覚は、将来ますます深刻になって行く思想戦に備える必要からしても、第一線の思想的陣容の強化として大切な事である。現地の日本人が感激を持たず自覚を持たずして、だらけていては、如何に日本が皇道をいい道義を主張しても、それでは築く一方から崩して行く事になる。国家の主張と国民の実践とが表裏一体で進まなくては国家の躍進は見られぬのである。

昨夜も夜中に表を通るおびたしい足音に眼を覚まされて外を見たら、数千の在郷軍人の夜中行進であった。雨の中を昨夕新公園を出発して〇〇方面まで数里

の道を行軍して来たとの事である。雨の中を数千の在郷軍人が堂々と行進して行く様を見て、大東亜戦以前の上海と思いきらべて思わず泣けて来た。

四年前、自分等が上海に来た当座は、南京路を歩くにしても、隠れる様にして歩かぬと危険で、河向うのデパートで物を買うにしても、小さくなって買うといった始末であった。

三年程前の春南京路を歩いて、春雨や同胞の影も見えず南京路と駄句った事があるが、今はどうかというに、虹口といわず租界といわず、高い建物には日章旗が翩翩とひるがえっている。

南京路にも北京路にも皇軍の哨兵が立ち、陸海軍の軍用車が堂々と轟進している。

自分達はこの日をどの位待った事であるか！この頃は居留民の男子も、日曜には必ず群をなして広中路の海軍表忠塔の勤勞奉仕に出掛けているが、塔下に眠る陸戦隊の英靈も、今日の上海を見て必ず満足されている事と思う。

春光や四百余州に芽ぐむ草

この阿媽は近いうちに嫁に行くそうです。それも別に好きで行く訳で無く、阿媽の父親がその男から金を借りているので行くのだそうです。家でも可哀相に思つて沢山の金でも無いから出してやろうといひましたら、それでは阿媽の父親の面子が無くなるというのです。それでこの阿媽は、仕方が無いけれども父親の面子のために嫁に行つて、そして一日も早くその男の死ぬのを待つといひています。

死ぬのを待たれる亭主こそ甚だ迷惑な事だが、然しこの話なども中国の下層階級の日常を観る上に於て一寸面白い話である。

とにかく上海は、観ればみる程、識れば識る程複雑な都市である。

然しこの上海も長くいれば次第に地に着いて来て、住みよい所を発見して来る。それは上海は物資があるとか生活しよいかのこせつした事では無くして、自分は上海郊外の風物に於てそれを観ている。

虹口（日本人の昔から居る所）の市内を一步出れば、既に青々とした畠であり、クリークでありそしてことごとくが古戦場である。古戦場といつても僅かに数年

前の事で、まだ生々しい破壊されたトーチカ、壊れた家屋が夏草の茂る中に残されている。

既に四度上海で夏を迎えて夏草の上に立つごとに、国破れて山河在り、そうした気持をしみじみ味つて来ている。

広中路の海軍表忠塔に立つて遙かに左を眺めれば大場鎮の戦跡であり、右の方を望むとそこは江湾鎮の戦場で、その先、揚子江に面した所が呉淞の砲台である。破壊された呉淞の砲台に登つて見ると、そこには洋たる揚子江が土色の波を立たせている。この土色の水を見るたびに、これが日本の様に青い水だったらと思うのも毎度の事である。支那の子供は絵を書く時に海の水や河の水を矢張り土色に書くそうである。

この上海も大東亜戦後は確かに一変した。特に日本人の多くいる虹口側ががらりと一変し、ダンスホールは悉く転業するし、料理屋の前に列を作つて並んでいた官庁や商社の自動車の行列も見られなくなった。——それに一番嬉しい事は、上海にいる日本人の全部が、十二月八日の朝以来戦争という現実の問題に本當に飛

の執着に恋々としている。人間の弱い姿はなるべくみたくはないが、集団生活では止むを得ない。しかし、

A級不起訴組の中にも立派な態度の人も少なくない。

岸信介、石原広一郎、青木一男、河辺正三、安倍源基、村田省蔵、酒井忠正の諸氏がいてくれることは意を強くするし、笹川良一さんの強い鼻っばしはこの不愉快さをふっ飛ばしてくれる。C級のN君がやってきて、

東京裁判を新聞でみてみると「自分は戦争には反対だった」という人ばかりで、そうでない人はいませんね。日支事変はともかく、大東亜戦についてはもったんとか言いようはないものですかね。

という。これにはちょっと唖ったが、

そのうちに一人や二人はそうした人もでてくるよ。

という、

それは、誰です。

ときくから、

それは、すでに死を決している人がするだろう。

と答えた。

六月二十七日（晴）

今日は高橋三吉氏と共に市ヶ谷へ証人として出かけた。市ヶ谷の面会所で、東条さんが大きな声をだして

原稿を読み上げているのを、肌ぬぎ姿の清瀬弁護士が金網越しに筆記していた。東条さんの口調は昔ながらの演説口調だった。昼食のとき東条さんと隣合せになったので、いろいろ話したが、東条さんは、

自分の個人弁論には一人の証人も要求しない。

と言っていた。戦時中の東条さんには、自分は反感はもっても好感はもてなかった。しかし、今はちがってきた。それは、東条さんが、国民にたいする責任を自覚し、いかに苦悩しているか、ということを知ったからである。今の日本には「俺は騙されたのだ」という人間ばかりで「自分に責任がある」と言いきれる人は少ない。日本の将来のために自分はそれを淋しく思う。

市ヶ谷からのかえりに、バスの窓から外をみる。池袋の附近のいろいろな店は、戦時中の中国難民街の泥棒市場を思わせる。街の子供のボロ姿、バラックの前で子供を抱く母親の疲れた顔など、戦乱の中国でみたと同じ情景である。敗れた国のみじめさは、どこの国も変りはないのだ。

お大名はお行儀がよろしい

七月一日（雨）

今日は妻との面会日だった。外では米が一升百五十円もする、という話から「巣鴨では近頃豆を代用食にしている」というと、妻は、

社会党の天下だなどと威張ってみても米の配給さえできない。

と話す。面会からの帰りに廊下で、元航空兵器総局長の遠藤三郎氏に会う。遠藤氏は、

外にいるより、巣鴨で百姓している方が呑気でよい。

というから、

さあ、それはどうですかね。

と言って別れた。

夕方、高橋三吉氏が市ヶ谷からかえってきた。先日、市ヶ谷の話がでて、昼食のとき東条さんがパンを一切

れのこしたのを、高橋さんが勿体ながって、今度行ったら食ってやろうと言っていたので、

どうです、今日は東条さんのパンを食いましたか。

ときくと、高橋三吉大將、

それがね。今日も隣に坐ったし、残したするのでね、一つ食ってやろう、と思ったら、右隣にいた武藤章君がパクンと食ってしまったね。ああ！残念なことをしたよ。

さすがに高橋さんらしいユーモラスな話である。

この一月ほどは巣鴨でも豆の代用食ばかり、ガスの発生が旺盛になって、みんな閉口している。笹川さんが何を言うかと思うと、

君、君、お大名というものはさすがにお行儀のええもんだな。酒井伯爵と一緒に部屋にいるが、お殿様のガスの音をまだ一ぺんもきいたことがないよ。

という。なるほど小笠原流とはそんなものかと思った。

七月七日（晴）

散歩場を歩いていると、ある男が、碧梧桐の枯れ葉が煙草の代用になるんですよ。

初に発した言葉は、

「満州を日本が侵略するようなやり方は、自分はぜったい賛成できぬ。むしろ、日本はおなじアジア民族としての観点から、この地に五族協和を目標に、いわゆる王道楽土を築きあげる考えでなければだめである」

青年児玉は「勝いくさに乗じて、疾風のごとく満州の曠野に猛進撃をつづけつつある得意の軍部を前にして、『満州を奪うなかれ！』と苦言する先生の人からと、その確固たる信念に心を惹かれた」（『自伝』）

おそらく、これが児玉が「東亜連盟」の思想に接した最初であつたかもしれぬ。「東亜連盟論」は大雄峯会系の満鉄社員、「満州青年連盟」系の現地民間人、関東軍の中の心ある軍人の間におのずから萌芽し、それが石原莞爾將軍の天才によって、「世界最終戦論」と共に完成された大理想であり、予言であつた。それはすべての予言と同様に、実現せられざる理想として終つたように見えるが、理想は死滅するものではない。現在なお心ある青年を奮起させる力をもっている。

児玉が石原將軍に会つたのは在満時代ではなく、將軍が東条英機によって左遷されて舞鶴にいた頃であつた。

た支那の民衆の惨苦を悼み憤る心情が基調をなしている。

これは私の独断ではない。日支戦争の燃えきかつている昭和十四年の「上海だより」の中にこの句があるのだが、その書出しは、

「冠省、上海は相変らずです。二か月ほど見ないので何か新しい動きがあるかと思いましたが、何の動きもないようです。物の上に於ても、思想の上に於ても。殷賑を極めているのは、ダンスホールとカフェーと芸者屋と料理屋です。この点は日本もそうだと思うれますが、然しこちらは内地ほどのそれに対する取締りもありません。とにかく夜電灯がとると、月の家とか六三亭とか東郷とかに行つてごらんさい。興亜院の車や領事館の車や、軍部の自動車のみがずらりと並んでいます。」

然かも一転、眼をこの三業地から数町足らずの戦後の廃墟街に移してごらんさい。そこには家を焼かれ財を失つた支那民衆が、食うや食わずで喘いでおります。

日本人を見る支那人の、この恨みに燃える眼の色が

た。昭和十四年六月二十日の石原日記に「児玉蒼士夫氏ヨリ意見。真ニ近來、否事変以來ノ大文字、感嘆久シウス」同じく七月十一日の項に「午後八時頃児玉氏來リ、零時半頃マデ話シテカエル。珍シキ人物ナリ」と記されている。何を語つたかは、この日記だけでは不明だが、石原・児玉の間に、思想上の共感と交流があつたことだけは察しられる。北一輝の「日本改造法案」と石原莞爾の「東亜連盟論」は青年期の児玉蒼士夫にとつては二大經典であり、その思想形成に大きく作用していることは疑えないが、同時に青年児玉の意見書が石原を「事変以來ノ大文字」と感嘆させた事實は注目に価する。どんな意見書であつたかは、いずれ本人に尋ねて紹介しよう。

万骨を枯らして悲し唐の秋

これは昭和十四年十一月、日支事変のただ中の上海でつくられた句である。俳句として形も調べもとのつているから挙げたのではない。この句の中の万骨は「二将功なり万骨枯る」の発想とはすこしちがう。日本兵の戦死者のみを指したのではなく戦争の犠牲になつ

そうでなくなった時こそ、東亜新秩序が成るの日と思われます」

「今までの日本の対支政策なるものが、白色人種流の帝国主義でなかったとは、我々も言いきれぬのです。實際その通りなのだから——」

「我々日本人が遵奉せねばならぬ大御心と申すものは、今日まで、日本の政治家や資本家が支那本土に於て為して来たような事を絶対に意味しておらぬ」

「要するに日本人が支那本土に於て日本国家のためと称し、もしくは日本国民の名を以て白色人種流の精神を實踐してきたのが、第三者よりすれば即ち侵略的帝国主義だったのであると思われます」

「我利本位の会社を作り、もしくは利権を獲得すること、即ちこれが大御心に相反する白色人種流の帝国主義なのです。こうした状態を再びくりかえして行くと、十年後、二十年後にやがてまた、第二第三の日支事変の起る事は、火を見るより明らかなことです。」

そしてその我利我利亡者共の起した戦争の責任を何の關係もない一般国民が血を以て償つて行かねばならぬのです」

しかし、石原もまた理想家である。「いくら困難でもやってみなければなるまい。この現状のままでは日本の命取りだ」と言い、辻政信参謀を兒玉にひきあわせて、秘密な和平工作に乗り出した。「派遣軍將兵に告ぐ」は辻参謀が起草したのだが、兒玉の意見書の影響も多かったという。日本軍將兵の驕兵ぶりを戒め、対支政策の大転換を望んだ大文章である。これを支那訳したのは、飛行機で、重慶市内にも撒かれた。

東条英機は激怒して、かの悪名高い「戦陣訓」を書かせて発表し、石原莞爾は内地の閑職に左遷され、兒玉は参謀本部嘱託を減になった。

私は豊臣秀吉を特に研究したことはなく、「太閤記」の出世物語を史実と信じているわけでもない。実を言

えば、出世して位人臣を極めた後の秀吉を好まない。ただ、木下藤吉郎や羽柴秀吉時代の奇策縦横ぶりと、全身を打ちこんだ奮闘と不屈の魂を次々に先輩に認められて、活動の機会と舞台を与えられ、おのれの運命を切り開いて行く青年の姿が物語以上の興味を誘う。兒玉督士夫という人物の面白さは、「太閤様にならなかった。またはなろうとしなかった木下藤吉郎だ」という点にある。そっくりだとは言わぬ。どこか似ている。

彼の昭和十四年（二十八才）以後の履歴書を読むと、次のようになっている。

- 昭和十四年 陸軍参謀本部嘱託（奏任官待遇、佐官相当官）
- 同 年 外務省情報部嘱託（上海において、反共情報の収集並びに近代中国の根本的調査資料の収集に当る）
- 昭和十五年 支那派遣軍總司令部嘱託（奏任官待遇、佐官相当官）
- 昭和十六年 印度支那派遣軍嘱託
- 同 年 海軍航空本部嘱託（勅任官、将官相当官）

当官

同年十二月 兒玉機関（特務機関）設立（上海を本拠に内外各地において海軍航空本部の物資の調達、並びに情報収集活動を開始、終戦まで活動）

昭和二十年 内務省嘱託（勅任官）

同年（二十四才） 東久邇内閣参与

同年十二月 A級戦犯容疑者として巣鴨拘留所に入獄

昭和二十三年 無罪釈放

昭和二十四年 中華民國の信頼により大公貿易株式

会社を創立、海南島並びに台湾に軍需物資の調達並びに輸送に当る。

現在 日本における反共の指導的組織たる交風倶楽部の代表の任に当る一方、

昭和四十年（五十四才） 我が国最大の反共民族組織たる青年思想研究会（傘下団体三十七団体、構成人員約五、〇〇〇名）を設立、青年の指導に当る。

東亜相互企業株式会社他二十数社の会長並びに顧問に就任。

現在の彼は六十歳を越えた。この履歴書を見せたなら、「何を今更らしくこんなものを引っぱり出すことはないじゃないか。どうせ人の書いてくれた履歴書だ。その上、おれは昔からただの反共屋ではなかった」と、羞かみながら苦笑することであろう。同時に、心のどこかで、「我が事において後悔せず」とひそかにつぶやく声のあることも否定できまい。太閤様になっていたら、後悔もあろう。なれず、なろうとせず、生来の反骨を貫き通したのだから、後悔はない。ただ右の履歴書を読みつつ彼の胸中を往来するものは、彼の奇才と力量を愛して引立ててくれた多くの先輩と、愛国運動と兒玉機関の内部で文字通り生死を共にした同志たちの面影であろう。その大部分は、今は故人である。

昭和二十年八月十五日、日本降伏の日である。戦争中の日本人が誰も予想できなかった新状況がこの日から生れ、三十四歳の兒玉督士夫の後半生も、この日から始まる。